

ASSOCIAÇÃO CENTRAL NIPO-BRASILEIRA NOTÍCIAS E INFORMAÇÕES

# ブラジル特報



あの町この町  
クーニャ Cunha



## 特集 アンゴラとブラジル

- ・植民地ブラジルとアンゴラの南大西洋を巡る深い関係史
- ・サブサハラの経済大国アンゴラ～日本とブラジルが果たす役割～



新規会員募集中!

詳しくは協会へお問合せください。



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail [info@nipo-brasil.org](mailto:info@nipo-brasil.org)

〒105-0004 東京都港区新橋 1-18-2 明宏ビル本館 5階 TEL:03-3504-3866 FAX:03-3597-8008 発行人: 大前孝雄/編集人: 岸和田仁

# 鉄とともに、人とともに。 私たちのSDGs

ふとまわりを見れば、社会は鉄でできたものにあふれています。様々なものづくりで暮らしを便利に快適にしたり、災害に備えインフラをより強く安全に変えたり、豊富な資源と高いリサイクル性で環境負荷を軽減したり…鉄はこれからも、人と地球の未来をささえる無くてはならない素材です。だからこそ、日本製鉄は鉄を進化させ続け、皆さまと力を合わせて持続可能な社会づくりに取り組んでいきたい。私たちのSDGsに、終わりはありません。

## 目次

あこの町この町  
クーニャ [小林大祐] ..... 3

ブラジル・ナウ  
アルゼンチン経済盛衰史とブラジル経済の現況  
[「ブラジル特報」編集部] ..... 5

【特集】アンゴラとブラジル  
植民地ブラジルとアンゴラの南大西洋を巡る深い関係史  
[「ブラジル特報」編集部] ..... 6

【特集】アンゴラとブラジル  
サブサハラの世界経済大国アンゴラ  
～日本とブラジルが果たす役割 [澤田洋典] ..... 8

マラカトゥという熱病にかかって  
[新多正典] ..... 10

ブラジル現地報告  
カシャッサの聖地サリーナス [宿口豪] ..... 12

新刊書紹介 ..... 13

連載・ブラジルあれこれ  
インバウンドガイド養成コース ..... 13

連載・ビジネス法務の肝  
カルテルに対する制裁金算定ガイドライン  
[柏 健吾] ..... 14

連載・勤どころ～税務&ホットトピック～  
ブラジルにおける  
キャッシュ・コンバージョン・サイクルの動向  
[三上智大/天野義仁/フランシスコ・クレメンテ] ..... 15

インタビュー  
短編映画『ムイト・プラゼール』の朴正一監督に聞く  
[「ブラジル特報」編集部] ..... 16

キャンパス・コラム  
ブラジルでの学生生活 [加藤七海] ..... 17

ジャーナリストの旅路  
ブラジルは子育てがしやすい [軽部理人] ..... 17

連載・文化評論  
追悼：醍醐麻沙夫さん  
ジャズピアニストから作家へ、  
ブラジル移民史の“語り部” [岸和田仁] ..... 18



写真＝永武ひかる  
「表紙のひとこと」

「弦に打楽器と手拍子、高まるかけ声。日が暮れた広場で白いユニフォームが躍動していた（トカンチンス州バルマス）。アフリカ奴隷に由来する、武闘、踊り、音楽が混合するブラジルの文化、カポエイラ。ユネスコ無形文化遺産にも登録されている」

永武ひかる：ブラジル撮影約30年、著作に写真絵本「世界のともだち3 ブラジル」（備成社）等。www.hikarunphoto.com

あの町、  
この町

## クーニャ Cunha

サンパウロから車で4時間、南米一の陶芸の里として知られる Cunha には過去3回訪問したが、その道中に関してはいい思い出がない。はじめてのときはこんな感じだった。

村の陶芸の歴史は日本人陶芸作家らが1975年に移り住んだことに始まる。そのパイオニアの一人、請問美重子さんのアトリエでゆっくり過ごしたあと、小さな宿に泊まった。シャワーを浴びて寝ようと思ったとき、同行の年配の方が機嫌を損ねて帰ると言い出して譲らない。真夜中のBR116を激走してサンパウロに戻った。

2回目は夜行バスだった。ピンガの大びんが回ってきて酒宴が開かれ、酔った乗客たちは運転手をののしり始めた。バスは次第にルートを変え、警察署に向かった。3回目は寝坊だ。携帯が普及してないせいで迎えに来てくれた人の合図に気づかず。数時間あわてて後を追いかけてタクシーで向かった。

だが、本来はゆっくり向かいたところ。なぜなら、サンパウロから国道BR116をリオ方面に走り、たどり着く途中にはAparecidaあり、Guaratinguetáあり、そしてCunhaから海岸山脈を下ってすぐにParatyありと、車窓の景色にはブラジルの500年が詰まっている。

Aparecidaはブラジルの守護神である聖母の大聖堂が建つ土地。その目と鼻の先、Guaratinguetáはブラジル最初の聖人となったFrei Galvãoの生誕地で教会や記念館がある。美術ファンにはDi Cavalcanteの傑作『Cinco moças de Guaratinguetá（グアラチンゲタの5人の娘たち）』（1930）でもおなじみだ。

ブラジルのカトリックの歴史と近代アートの足跡を訪ねたあとに待ち受けるのはEstrada Real（王の道）。かつてミナスジェライス州で採掘された金や宝石を港まで運んだ道を行く。そうしてCunhaまでの東の間、Ouro PretoからParatyまでウマやラバの隊列（tropeiros）が往来した時代に思いをはせてみる。

人口2万のCunhaは平均標高1,100メートルの保養地で、渓谷に囲まれた地形はエコツーリズムや自転車競技の愛好者を魅了する。古くから生産されているワイン、最近ではラベンダーやオリーブでも知られるようになったが、忘れてはいけない名物といえばやはりアラウカリア松の実（pinhão）とそれを使った料理の数々。

来年は日本人移住者らが登り窯を設置して50年になる。その記念行事には市民の数を上回る人が訪れることだろう。



小林大祐（「ブラジル特報」編集委員）

# 広島から Tudo Bem?

## ブラジル移住の被爆者の苦労、地元で 広大医学資料館が5月まで展示

ブラジル被爆者平和協会（2020年末に解散）が県医師会に昨年寄贈した資料などが広島市南区にある広大医学部医学資料館で「イペの花の下の被爆者」と題して公開されている。5月17日まで。

届いた6個分の段ボールの資料の一部は昨年8月から県医師会館で公開されていたが、このたび約半数を展示。健康の不安のなか、支援を訴えた在外被爆者の生活と実情に迫る内容となっている。

ブラジルのほか、ペルーやアルゼンチンなど南米5カ国に住んでいた被爆者139人が回答した実態調査の原本のほか、現地の活動も伝える。被爆者へのアンケートでは「日本の病院で治療を受けたい」「日本の被爆者と同等の援護を」と訴えがつけられる。加えて、パネルなどで移住自体の歴史や背景にも触れている。

主催する広島大原爆放射線医学研究所の久保田明子助教は、「被爆者の声はもちろん移住先の生活などが理解できるよう展示にも工夫をこらした」と話している。

中国新聞は同展示に関する4月5日付の記事で、サンパウロ

在住で資料の寄贈を主導した協会元理事の渡辺淳子さん（81）の「援護を受けられないまま亡くなった人も多い。苦労が詰まった貴重な記録を多くの人に見てほしい」とのコメントを掲載している。



▲主催の広島大原爆放射線医学研究所の久保田明子助教。会場で

## 恒例の平和記念碑清掃を実施

毎年の恒例行事である記念碑の清掃作業を3月に行った。この碑はブラジルの国土を型どった黒御影石製で、高さ約2メートル、最大幅約1.6メートル。「祈平和BRASIL」と彫られており、平和公園近くの川のほとりにひっそりと佇んでいる。

1990年にブラジル広島県人会（現ブラジル広島文化センター）、ブラジル長崎県人会などが募金活動を行い、広島市に

送ったもので、建立当時、約160人いたというブラジルに渡った広島や長崎の被爆者の思いと、平和を通して両国を結ぶ願いが込められている。

コロナ禍後の3年ぶり再開となった昨年にもまして、しっかり約1時間清掃活動を行った後、懇親昼食会を行った。会員らは「こんなところに記念碑があるとは」「来年はブラシを持ってきてしっかり磨こう」などと話していた。



▲清掃後に記念撮影

## 広島大学のブラジル人留学生と懇親

広島大学で学んでいるブラジル人留学生五人を招き、本会主催の懇親昼食会を行った。田中秀和会長、辻井克利事務局長が参加した。かねてから広島で学ぶ学生を力づけたいとの会長の思いから大学関係者に働きかけ、このたび実現した。

学生らは「シュラスコもいいけど日本の焼肉は本当に美味しい」と目を丸くしていた。日本語レベルは十分に高く、話題はさまざまな方面に渡り、ときおり笑い声も起きていた。

田中会長は、5月にある広島市最大級のイベントで実施するサンバパレードへの参加を促し、会報誌を送ることを約束。学生らは「広島

のことをさらに学ぶため、いろんな活動に参加したい」と笑顔を見せていた。

▲焼肉に舌鼓を打つ前にパチリ▶



## 広島日伯協会

ブラジルと広島の交流を推進するため1969年に創立。在広島ブラジル人との多文化共生社会を支援し、ブラジル広島文化センター（県人会）と県、市ほか関係市町村と連携を取りながら活動している。法人会員75、個人会員80。田中秀和会長（6代目、2020—）は、在広島ブラジル連邦共和国名誉領事。



# アルゼンチン経済盛衰史とブラジル経済の現況

## 経済学者クズネッツの至言

最近日本のメディアの経済コラムなどで引用されることが増えて来た一文がある。

「世界には4種類の国がある。先進国と発展途上国、そして日本とアルゼンチンである。」と述べたのは、1971年にノーベル経済学賞を受賞した米国人経済学者サイモン・クズネッツであった。言うまでもなく、発展途上国から先進国へ短期間でレベルアップしたモデル事例が日本であり、かつて先進国であったのが発展途上国へレベルダウンしてしまった代表例がアルゼンチンだ、という意味で経済学者が語ったのである。

100年以上前のアルゼンチン経済を世界トップクラスまで引き上げたのは、パンパ大平原の農畜産パワーである。19世紀後半から、畜産や穀物生産（主体は小麦）が急速に発展し、羊毛や牛製品（皮革と塩蔵牛肉）の欧州向け輸出が莫大な外貨収入をもたらした。20世紀に入ると冷凍技術のおかげで冷凍牛肉の輸出が本格化する。こうした農畜産パワーのおかげで、20世紀初頭から1920年代までアルゼンチン経済は世界で5番目の経済力を誇っていた。

2010年に創設された歴史統計プロジェクトで知られる「マディソン・プロジェクト」の統計データによれば、1913年の国民一人当たりのGDP数値（米ドル建て）では、アルゼンチンはUS\$6,052と、米国、英国、オーストラリアに次いで世界4位となっており、ドイツやフランスよりも上位であった。ちなみに同年の日本の一人当たり数値はUS\$2,431、中国はUS\$985、ブラジルはUS\$1,046であったから、日本人の倍以上、ブラジル人の6倍弱と、アルゼンチン経済力のすごさを再確認することになる。

ここで改めてブラジル経済とアルゼンチン経済のGDP比較をざっくりしておくと、1962年はアルゼンチンUS\$24.4billion、ブラジルUS\$19.2billionであり、ブラジルのGDPがアルゼンチンを上回るのは1967年からである。南米経済全体に占める割合でいくと、1960年はアルゼンチン37.9%、ブラジル26.4%とアルゼンチンのほうが10ポイント以上上回っていたが、2022年の数値は、アルゼンチン15.5%、ブラジル50.4%となっている。すなわち、60年前はブラジルの1.2倍ほどあったアルゼンチン経済が、60年後には、ブラジルのGDPの三分の一以下になってしまった。

かつて世界第5位であったアルゼンチンGDPランキングは、現在23位となっている。石油やガスといったエネルギー関連でも穀物類や畜産品といった農業関連でも、自給率は100%以上と豊かな天然資源に恵まれ、人材的にも文化水準、教育水準の高い国民を有し（ちなみに、ノーベル賞受賞者は5名、医学賞・化学賞3名、平和賞2名）、ヒトモノも南米のなかでは

抜きんでているにも関わらず、経済的には先進国から途上国へ転落してしまった。何故だろう。歴史学者によれば、イギリス資本が歴史的にアルゼンチンの富を収奪してしまったから、羊毛・小麦・牛肉の輸出で得た資本が蓄積して産業の転換・発展に繋がる、という流れに向かわなかった、という説明であるが、それだけでは説得力がない。また、ペロニズムに代表される、財政規律無視の公的債務積み増し&踏み倒し政治が「諸悪の根源」とする「わかりやすい通説」も、それだけでは説得力がない。このアルゼンチン経済盛衰史の解明はブラジル経済に関心を有する者にとっても必須マターである。

## ブラジルのGDPランキング

日本のGDP順位がドイツに抜かれて世界3位から4位に下がったと大きなニュースになったが、最近のブラジルのGDPランキングは下がったり上がったりと忙しい。2003年には世界第14位となってしまったが、その後は順調に順位を回復し、2010年から2014年まで連続して7位のポジションを維持していた。その後ズルズルと下落し、2020年には12位、2022年に11位と若干持ち直し、昨年2023年はカナダを上回って世界9位となって、ベストテンに復帰している。

## 2023年度の経済成長率と投資関連ニュース

2月29日に発表されたIBGE（地理統計院）のデータによれば、2023年度のブラジル経済（GDP）成長率はプラス2.9%であった。部門別の成長率をみると、農業部門15.1%、工業部門1.6%、サービス部門2.4%、家庭消費3.1%、輸出9.1%といずれもプラスであるが、投資部門は▲3%とマイナスであった。

低調な投資状況に危機感を有した政府（経済省、商工開発省）は早速、投資奨励プログラムを策定、自動車業界向けには「MOVERプログラム」という総額190億レアルの税制特典を供する計画を発表している。これには各社は即ポジティブな反応を示している。

昨年12月から今年3月にかけて自動車大手ブラジル法人の投資計画が発表されているので、列記してみると、ルノーが20億レアル（約600億円）、フォルクスワーゲン、2028年まで160億レアル（約3,180億円）、ヒュンダイ54億レアル（約1,620億円）、トヨタ110億レアル（約3,300億円）、ステランティス2030年までに総額300億レアル（9,000億円）、といずれも巨額の投資計画である。ブラジル市場の将来性への確信は揺らいでいない、と理解できるだろう。

【ブラジル特報】編集部

# 植民地ブラジルとアンゴラの南大西洋を巡る深い関係史

『ブラジル特報』編集部

## 歴史学者ルイス・フェリッペ・デ・アレンカストロ (元パリ大学教授)

アカデミズムの世界では国際的に知られる歴史学者ルイス・フェリッペ・デ・アレンカストロは、単に歴史学や社会科学の分野ばかりでなく現実の政治についても積極的な発言を続けてきたブラジル人知識人(現在パリ大学名誉教授、ジェツリリオ・ヴァルガス経営大学教授)である。

1946年、サンタカタリーナ州イタジャイ市で生まれた彼が過ごした学生時代(ブラジリア大学)は、軍事政権が強権的政策を力で進めていた時期であり、学生運動家として警察の取り調べを何回も受けていた彼が学問研究を続けられたのは、20歳の時、奨学金を得てフランスに留学することができたおかげだ。(彼の主著『命ある者たちの協約』のはしがきの最後の部分で、学生時代の友人3名が軍政によって殺された、と淡々と記している。)

歴史学で博士号を修得したパリ大学で、正教授(ブラジル・南大西洋研究センター所長兼任)として活躍した彼の研究対象は、ブラジル形成史、とりわけアフリカとの関係史であるが、膨大な史料

データに裏付けされた論文群はいずれも強烈な説得力を有している。

一般読者向けの歴史読本といえるルシアノ・フィゲイレード編『お忙しい方々向け、ブラジル史』(2013年)に収められたアレンカストロ教授の論考『アンゴラなしではブラジルなし』は教授の研究結果をわかりやすく要約的に叙述している小論なので、この論旨を復習してみよう。

大西洋におけるポルトガル植民帝国は、大西洋の西側ではブラジルが奴隷制に基づく経済・社会を発展させ、大西洋の東側ではアンゴラやギニア湾岸において奴隷労働力の再生産流通チェーンが整備・形成されたのであり、この両面が融合して一つの植民地搾取システムとなっていたのだ、というのが極めて乱暴な要約である。この奴隷制の遺制は今日のブラジルでも深く居残っている、というのがアレンカストロ教授の主張であるが、この小論の結語部分を翻訳してみよう。

「南北アメリカ大陸における奴隷制国家のなかで、アフリカの重要性がブラジルほどあるところはない。アンゴラへのブラジルによる介入は、ギニア湾とリわけダホメ王国(現ベナン)に対しても同様であったが、それが無くなるのは1850年、すなわち、南大西洋における黒人奴隷貿易が終焉した年、以降のことである。より具体的にいえば、ブラジル経済にとって最も長期間続いた経済サイクルは、1550年から1850年まで継続された黒人奴隷貿易サイクルであった。そのほかのサイクル、つまり、砂糖のサイクル、タバコのサイクル、金のサイクル、コーヒーのサイクル、これらすべては、実際のところ、奴隷貿易サイクルに付属したサブ・サイクルでしかなかったのである。この文脈において、ブラジルという国の形成はアンゴラの破壊という犠牲の上に成り立ったものであった、といえるのだ。」

アレンカストロ教授の歴史解釈に従って、16世紀から19世紀までの植民地期のブラジル史をざっくりと追いかけて

みよう。

広大な植民地ブラジルでは、18世紀までは分散した各地域が点として存在していただけだったが、ミナスにおける金鉱の開発が進み、労働力(黒人奴隷)も植民地国内市場も地域間交流が頻繁となるにつれ、地域限定から国全体への視点・概念が生まれ、ブラジルという国としての認識が出来上がったのであった。

植民地ブラジルの中心(リオ、パイア、ベルナンブーコ)から離れた地方、例えば、今日のマラニャンやセララまで含むアマゾン地域が、ブラジルの一部と“正式認定”されたのは1624年ではなく、それまではほとんど“無関係”の僻地でしかなかったのである。ブラジルの奴隷制経済中心地にとっては、こうした国内僻地よりもむしろアフリカとリわけアンゴラとの関係のほうがはるかに重要であった。すなわち、アレンカストロ教授の主著のサブタイトルが、南大西洋におけるブラジルの形成、となっているように、ブラジルは大西洋を挟んで対置するアフリカ(アンゴラ)との相互依存関係によって国づくりがなされたのだ。

## ブラジルのポルトガル語へのアンゴラの影響

ブラジルのポルトガル語は、インドヨーロッパ語族に属するポルトガル語に、先住民のツピー系言語が加わり、さらにアフリカ諸言語(ニジェール・コンゴ語族)がミックスしたブラジルの混濁言語、新型ポルトガル語であることは、多くの言語学者たちによって明らかになっている。なかでもアンゴラの民族語



▲パルマールレス記念公園入口に立つ母子像

キンブンドゥ語起源の単語が今でも広く使われている。

ブラジル人の日常会話でよく使われる単語を列記してみると、カスーラ(未っ子)、モレック(ガキ、子供)、キタンダ(八百屋)、デンデ(油ヤシ)、フバ(穀物粉)、キアポ(オクラ)、ブンブン(お尻)などなど、アンゴラ起源の単語が多い。ブラジルが世界最大の黒人奴隷輸入国(そのなかでも最大の奴隷搬出元はアンゴラ)であったことの証しである。

## DNA鑑定によるブラジル黒人のルーツ解明

2007年にボレミックな論文が公開された。

科学研究雑誌“Pesquisa Fapesp”2007年5月号に発表された、ミナスジェライス連邦大学のセルジオ・ダニエロ・ペナ教授とリオグランデ・ド・スール連邦大学のマリア・カチラ・ポルトリーニ教授という二人の遺伝学者による共同研究をざっと追いかけておこう。



▲パルマールレス・メモリアル公園記念切手

自己申告で自分を黒人とみなしているボランティアを募り(サンパウロの場合120名)、サンパウロ、リオ、ポルトアレグレの三都市でDNA鑑定の調査を行なったところ、サンパウロの場合43.1%、リオの場合31%、ポルトアレグレでは18%が西アフリカ地方特有の遺伝子をもっていることがわかった。これは、歴史学研究でこれまで言われていた、黒人のうち西アフリカ出身は10%前後であろう、との通説を大幅に上回る数字である。今回の調査結果が正しいならば、アフリカ中央部(アンゴラ)から連行されてきた人々は奴隷導入総数の70-80%ではなく、50%くらいで、西アフリカ出身が全体の30-40%ということになる。

この結果を知った歴史学者(リオ連邦大学マノロ・フロレンチノ教授)による説明は、「西アフリカでの奴隷貿易は1815年に禁止されたが、密輸はその後も行なわれていた。申告の上では、アンゴラから連れて来たことにしても実際はアンゴラからの数は僅かで途中ナイジェリアに寄港して大量に奴隷を積み出してたりしていた。こうした例は書類上はアンゴラ出身となっていたが、実態は西アフリカが主体だったのだ」と。

また、南伯に西アフリカ出身者が多いことについての説明は大きく二つの要因があるという。その1は、ヨルバ系の人びとは文化的伝統から自らの自由を求めるタイプが多く儉約して貯めたお金で自分を身請け解放し、ノルデスチで商業に携わってからサンパウロへ移動した例が多かったこと。その2は、サトウキビ経済が停滞期に入り、不要になった黒人奴隷がリオやサンパウロのコーヒー農園へ売り飛ばされた、こと。こうしてレシーフェやサルヴァドールからリオやサンパウロへ黒人奴隷の国内移動がなされたのだ、と。

また今回のDNA鑑定調査で改めて明らかになったことは、自分を黒人と思っている人も実は混血だった、ということだ。母親経由で伝わるミトコンドリア遺伝子を見ると、サンパウロで85%、リオ90%、ポルトアレグレ79%、と母親がアフリカ系である割合が高いが、父親経由で伝わるY遺伝子を見ると、同様に48%、56%、36%がアフリカ大陸出身を示す、という。すなわち、母親は黒人系だが、父親は白人ないしインディオの遺伝子が入っている割合が低くない、ということだ。つまり、ブラジル人は黒人でも純血は少なく、多様な混血状態にあるということが、この論文で科学的に裏付けられた。



▲パルマールレスの闘争をデザインしたTシャツ図案



パルマールレス記念公園から見える周辺風景

## 逃亡奴隷共同体パルマールレスとアンゴラの関係

ブラジルは世界最大のアフリカ黒人奴隷輸入国(およそ400万人以上)であるが、アンゴラがブラジル向けには最大の奴隷供給地であったことは紛れもない歴史的事実である。だからこそ、ブラジル史上最大のキロンボ(逃亡奴隷共同体)であったパルマールレス(16世紀末から17世紀末まで)が、かつて「アンゴラ王国の再現」とみなされたこともあったし、現在でも学説によっては「アンゴラの典型的な村落と同様に構成された共同体」であった、とされている。そもそも、キロンボという単語もアンゴラで話されている諸言語の一つキンブンドゥ語で集落ないし戦争時の野営地を意味しているし、リーダーだったズンビも同言語で靈魂の意味である、といったことからしても、パルマールレスとアンゴラの深い関係が見えてくる。

米国人ブラジル学者ステュアート・シュワルツの“Escravos, roceiros e rebeldes”(奴隷小農夫と反逆者)(2002, EDUSC)に所収されている論文「パルマールレス再考」よれば、確かにアンゴラの伝統が生きていて、小アンゴラと呼ばれていたことは事実であるが、「アンゴラの歴史」として両者の関係はそれほど重要なことだろうか」と疑問を呈している。最新のアフリカ研究を読み込んだ上で論考を進めているが、16世紀から17世紀にかけてのアンゴラ地方は紛争・戦争の連続で、王国といえるような大きな権力はなく、小さく分裂した集落ばかりであったから、それと同様の国づくりをパルマールレスの創設者たちが構想したのであれば、それはオリジナルのモデルの変形でしかなかったはず、とのことだ。

# サブサハラの経済大国アンゴラ ～日本とブラジルが果たす役割～

澤田洋典 (元アンゴラ大使・アフリカ協会特別研究員)

## はじめに

アンゴラとブラジルは歴史的に深い繋がりがあり、文化的な類似性もある。もちろんポルトガル語が共通語だ。そのため読者の中には、アンゴラ勤務も経験したという方がおられるかもしれないが、まだ日本では一般に馴染みが薄い国ではないだろうか。アンゴラはアフリカ第2位の産油国であり、サブサハラ第3位の経済大国だ。石油以外にも鉱物資源、農業、漁業、観光など大きな経済的ポテンシャルを秘めており、魅力ある投資先の一つである。日本企業は古くからアンゴラで事業を展開してきたが、近年インフラ、工業、通信などの分野で一段とプレゼンスを大きくした。ODAも、医療、教育・人材育成、地雷除去、港湾、エネルギーなどの分野で活発である。

本稿では、アンゴラの現状と日本やブラジルのアンゴラとの関りを紹介しつつ、今後、日本とブラジルがアンゴラのために果たしうる役割について考えてみたい。

## アンゴラは金の匂いがする？

私は1986年、外務省アフリカ第二課のアンゴラ担当として3週間ほどルアンダに出張滞在した。当時は、独立以来続く激しい内戦のため、首都ルアンダは荒れ果てており、日々の食事や宿にも苦労するほどだった(その時は日本大使館もなく、日本企業の駐在員の方に随分お世話になった)。それから30年後、アンゴラ大使として着任すると、アンゴラはアフリカ第2位の石油生産国として大きな成長を遂げサブサハラ第3位の経済大国となっていた。着任間もない頃、東京から来たある商社マンが「アンゴラはお金の匂いがする」と述べていたこと

が印象に残っている。確かに、首都ルアンダには高層ビルが立ち並び、繁華街は人で溢れ、活気に満ちている。富裕層は桁外れに豊かで、高級ショッピングモールの品揃えはブラジル以上だ。

また、見渡すと民間主導のメガプロジェクトが目白押しである。約1000億円かけて再建した世界最先端の繊維工場があり、700億円規模の港湾改修・拡張も進行中だ。ブラジルのフォルタレーザと光ファイバー海底ケーブル通信網が繋がっている。これらはいずれも日本企業が手掛けたものであり、日本のプレゼンスを示す象徴的なプロジェクトとなっている。

他方、アンゴラは極度に石油に依存しており、経済多角化という大きな課題に直面している(輸出の80%以上が原油)。また、極端な富裕層が多い反面、国民の大半は貧しいままだ。UNDPの人間開発指数は0.59で世界第150位と低迷している。首都ルアンダでも水、電気などの基礎インフラが貧弱で、地方は更にひどい。独立以来MPLA(アンゴラ解放人民運動)の単一党体制が続いたことで、汚職・腐敗も激しく、それが貧富の差拡大の要因ともなっている。2017年に就任したロウレンソ大統領はこうした課題に取り組みことを掲げて就任したが、その課題を抱えたまま、2022年から二期目に入った。一党支配にも陰りが見えてきた中で、経済再建と多角化、開かれた民主主義の確立が安定政権維持の鍵となっている。

## ブラジルのプレゼンス (ルーラ政権の遺産)

ブラジルは、第一次ルーラ政権下、積極的な対アフリカ外交を展開し、アンゴラにおいても、BNDES(経済社会開発



▲日伯方式地デジセミナーでスピーチする筆者(大使館撮影)

銀行)のクレジットラインを活用し、エネルギー、インフラ分野などで協力を深めた。その一例はBiocomで、8万haの土地でサトウキビ栽培から、砂糖及びエタノール生産更にバイオマス発電を一貫して行うアグロインダストリーのプロジェクトだ。オーデルプレヒト社(現OEC)が40%を出資して建設された。このプロジェクトを視察していると、対アフリカ協力を重視し、また、エタノールを軸とした再生可能エネルギー活用促進を売りとしたルーラ政権の経済外交の面影が漂う。もう一つは2000MW級の発電能力を有するラウカダム・水力発電所である。総工費43億ドル投じ、オーデルプレヒト社が建設を担当した。また、アンゴラはブラジルと同じように深海油田が多く、ペトロプラスも石油開発に参加していた。

その後PT政権による汚職問題、所謂LAVA JATOの影響で、BNDESの融資が停止されたり、これらの有力企業が撤退するなど、ブラジルのプレゼンスが大きく後退したことは大変残念だ。しかし、2023年、ルーラ大統領が再び咲き、早速アンゴラを訪問し、「アフリカに帰ってきた」と述べるなど対アフリカ外交を重視する姿勢を示している。ロウレンソ大統領との首脳会談では、医療、教育、

日本のODAのシンボル、ジョジナ・マシエル病院(筆者撮影)▶

農業、観光など7つの分野で協力する協定を締結したようだ。両国関係拡大のポテンシャルはとても大きい。

マルチ外交でもアンゴラとブラジルの関係は重要だ。BRICSが勢力拡大を目指す中、ルーラ大統領は、アンゴラのBRICS加盟を後押ししている。しかし、リーダーシップを発揮して欲しいのはむしろCPLP(注)だ。CPLP加盟国の中でブラジルの経済力は断トツであり、グローバルパワーとして、CPLPでより主導的な役割を果たすべきだ。(注)CPLP:ポルトガル語圏諸国共同体。ポルトガルが事務局を務める。日本はオブザーバー参加国)

## 群を抜くポルトガルの存在感

さて、ブラジルのプレゼンスが低下する一方で、アンゴラにおいて旧宗主国ポルトガルの存在感は圧倒的だ。ポルトガルとアンゴラの間には直行便が週20便飛んでおり、他の欧州便がそれぞれ週2~3便程度しか飛んでいないのと比較しても、ポルトガルとの人の往来が群を抜いて多いことがわかる。ブラジル便は週1便程度だ。

ポルトガルとアンゴラには強い相互依存関係がある。まず、ポルトガル経済はアンゴラに大きく依存している。2014年以降石油価格が暴落しアンゴラのGDPが減少した際、ポルトガルのGDPも低下したほどだ。ポルトガルの第3の投資先はアンゴラで、1200社が進出しているが、アンゴラと何らかの取引があるポルトガル企業は6万社に上る。大手企業でアンゴラとのビジネスがない企業はない。

他方、アンゴラにとりポルトガルは欧州の玄関口であり、第一の休暇先、病気療養先、留学先だ。最大の理由は言語だ。アンゴラでは外務省高官でも英語を話さない人が珍しくない。アンゴラ人にとっ



ては言葉の障壁のないポルトガルが最も居心地が良いのだろう。ポルトガルへの投資も活発だ(金融、マスメディアなど)。ポルトガルに住むアンゴラ人の数は約3万人(外国人全体の14%)だが、400年の植民の歴史的経緯からアンゴラとポルトガルの二重国籍者が多く、実際はその数倍と言われている。(ブラジル人は約40万人。)

アンゴラで飲まれているワインは殆どポルトガルワインだ。当時駐在していたポルトガル大使にその理由を聞くと、「ポルトガルのワインが一番おいしいからだ」とポルトガル人らしい返事が返ってきたが、近隣国南アの良質なワインの方がコスパは良い筈だ。実は、アンゴラと南アはアパルトヘイト時代の歴史的な敵対関係もあり経済関係が希薄なままであり、南アからの輸入は全体のわずか3%に過ぎない。(トップは中国16%(注)、2位がポルトガル11%。ブラジルは4%である)。(数字は2023年アンゴラ財務省統計)

## 日本が果たしうる役割 (日伯協力の経験と 日系ブラジル人の活躍)

日本は2019年、アンゴラとの間で技術協力協定を締結した。また、2023年には長い交渉の末、投資保護協定も締結した。こうした政府間の取り決めは、日本の対アンゴラ協力やビジネスを後押しする枠組みとして大変重要である。アンゴラの潜在力を考えると、日本のプレゼンスは今後更に拡大する余地があるが、言語の壁は大きい。だが日本とブラジルは、伝統的協力関係とそれに伴う技術移転、人材育成の経験を複合的に活用することで、協力してアンゴラにおける活躍の幅を広げられるだろう。貴重なのは日系ブラジル人の存在だ。日本とブラジルとの協力の橋渡し役でもあり、また、ポルトガル語という共通言語の大きな強

みがある。

私がベンゲラで繊維工場を視察した際、工場長として従業員の技術指導を行っていた人は、ブラジルの東洋紡で長く働いた日系ブラジル人だった。再建(EPC契約)を請け負った日本企業が、設計から建設に止まらず、しっかりと人材育成を行ったことは、日系ブラジル人を活用した質の高い協力の好例だ。また、ラウカダム発電所ではオーデルプレヒト社が撤退した後も同社の日系ブラジル人技術者が孤軍奮闘していた。

ODAでも既に日伯アンゴラの三角協力が機能している。ルアンダ湾を見下ろす高台にあるジョジナ・マシエル病院には大きな日の丸が聳えている。同病院整備計画は日本の対アンゴラODAの先駆けとして象徴的存在となっているからだ。この病院ではブラジル人の医師も活躍している。ヴィアナ職業訓練センターの生徒の多くがブラジルのSENAI(全国工業職業訓練機関)で第3国研修を受けている。最近の例では、自動車整備指導員を育成するトヨタアンゴラアカデミー(2020年開校)で、JICAの枠組みを活用した協力でブラジル人が活躍している。また、アンゴラが採用している地デジ方式は、日本が海外で初めて採用した所謂日伯方式(ISDB-T)だ。今後期待されるのは農業分野だ。アンゴラはかつて、世界でも有数の農業輸出国だった(特にコーヒー、綿花)。しかし内戦のため農業活動はほぼ壊滅し、近年の経済成長にもかかわらず経済の多角化が遅れ、現在に至っても食料の90%以上を輸入に頼っている状況だ。JICAによるコメ栽培プロジェクトも進行中だ。

日本とブラジルがアンゴラで果たしうる役割はまだまだ大いにありそうだ。

◀ブラジルが協力したアグロインダストリー Biocom (RPAnews)

# マラカトゥという熱病にかかって



新多正典  
(フォトグラファー)

## マラカトゥとの出会い

初めてブラジルを訪れたのが2017年。以降、パンデミックによって世界中が閉ざされた2020年までカーニバルの時期に合わせて北東エリアのレシーフェに通っていた。その地に根を下ろしたフォークロア「マラカトゥ」を題材に写真を撮るためだ。

2023年冬、2年間中断されていたカーニバルの再開を受けて準備をしていたものの、飛行機代の高騰と、続くコロナ禍の出入国規制に参ってしまい断念した。

そして2024年冬、「ブラジル」を挟み込む余裕もないくらいにコロナ禍対応の人生を進み出した私にとって、行かないための思いつく言い訳は山のようにあった。

## それでも行こうと決めた。

不謹慎なことばになるが、猟奇的な病に冒されたような感覚。ブラジルの、レシーフェの、しかもファベアラを拠点にしたマラカトゥには「出会ってしまった」という思いがある。それは好きかどうかではない。発作症状を引き起こし、行きたいから行く、ではなく、行かないことにはどうしようもない、というものだと言語整理している。

## Maracatu Porto Ricoとカンドンブレ



▲ポルトヒコ本部前

マラカトゥを演奏するチームは細かく分けると相当な数があるが、私は2017年からPorto Ricoというチームに合流している。Porto Ricoの演奏するマラカトゥに感動しているのが動機ではあるけれど、「写真に残す」ことを考えると、2017年当初は全く撮れなかった。その結果の一番の理由は、私と彼らの間に「壁」があったからだと思う。これをライフワークにするなら毎年通い少しずつこちらの熱意を伝えることと、彼らのベースとなるカンドンブレを理解していかないことには写真は変わらないと思った。

パンデミックの中断は、通い続けるか否かの思わぬ岐路になってしまったが、“ここまで続けた。ここまで関係を築いた”という実績が、簡単に辞めるわけにはいかないという気持ちとして背中を押した。

マラカトゥを演奏する人たちは、その多くがカンドンブレという宗教を信仰している。そもそもその宗教の信仰こそが本道で、信仰行為として彼らは頻りに教会に籠り密室での儀式を行う。その儀式の中でアフリカの祖先の言語を歌い太鼓を鳴らす。それら一連の儀式から流れでてくるものを彼らは「音楽」としては捉えていないかもしれない。ただ、それが私のような門外漢にとって、また多くの音楽好きにとっても琴線に触れるリズムを奏でているように思う。マラカトゥは、カンドンブレを信仰する彼らが、(乱暴な言い回しにはなるが)私たちに向かってマイルドに、ややポップに音楽化したものと捉えてしまっているかもしれない。場所も教会の中から路上へ。密室の儀式がカーニバルという大衆に向かう音楽に姿を変え、私たちの眼前に現れる。

## カンドンブレの儀式

“宗教行為として頻りに教会に籠り”と

▼カンドンブレの様子



書いたように、カンドンブレの儀式はその都度目的は異なり、コアな信仰者のみで深夜にひっそり行われる場もある。

実は2度目の訪伯から信仰儀式の撮影を許可され、今回に至るまで必ず撮影ノルマに加えるようにしていた。カーニバルが開始される直前の日曜日。“Nobre Ritual para Carnaval”という目的の儀式だ。儀式は休憩を挟み10時間前後。ひたすらに歌い踊りを繰り返す。とてもストイックな場で、今回は通算4度目の参加なので慣れを感じていたものの初めてこの場を体験した際はとても過酷だったことを覚えている。

街の全ての人がこの儀式に参加するわけではなく、浮かれた格好でブレ・カーニバルの喧騒へ向かう人もいれば相変わらず路上で飲んだくれてる人もいる。そういう人たちと距離を置き密室に籠る信仰者たちは、ステレオタイプのブラジル人とはまるで対極の硬派な姿を見せる。そんな彼らに魅了され敬意を持つに至った。それが撮影を継続する理由のひとつだろうと思う。

儀式の後半。生贄の山羊と鶏の首を掻っ切り、その生き血をカーニバルで使用する楽器に染み渡らせる場面では写真撮影にストップがかかった。生き物の首を切り、ひきちぎる。日本では忌避される場面がここではすんなりと淡淡と息を吸うように受け入れられる。あまりにもありきたりの感想だけど、子どもの頃か



らこういう場面を見ていたら人生をタフに生き抜く能力は自ずとついていくのではないだろうか。殺した山羊と鶏の頭は神の偶像の前に並べられ、胴体は調理室に運ばれ、その肉を「まかない」として休憩時と終了後に食べる。これら一連の儀式を、彼らはObrigação(義務)と呼び、楽しいカーニバルに向かう手前のやらねばならない通過行為として重く捉えられている。

不思議なもので私にとってはこれ乗り越えれば自然と日本人的な自分が抜けていき、ファベアラの厳しい環境にほぼほぼカスタマイズされた心身の状態に至る。

## カーニバルの出演

そしてカーニバル期間へ。明確に期間設定されているものの、いつのまにか街の喧騒はそれっぽい状態がフェイドインし、今日からカーニバルというのを実感しにくい。

Porto Ricoではおよそひと月前から水曜と土曜の夜に本部前の路上でEnsaio(全体練習)が行われる。彼らのテンポで本番を見越しての演奏は、実はこの場がもっとも高いパフォーマンスを発揮しているのではないかと感じ



▲コンペティション本番前

る。カーニバルの出演においては彼らの中で濃淡があり、ハイライトとなるのが“Passarela”と愛称を込めて呼ぶコンペティションだ。コンペのために毎年新しいテーマ(カンドンブレの神であるOrixáをひとり選び、その曲をつくる)を設定し、衣装を新調し、演奏の練習を繰り返す。カンドンブレという宗教信仰が本質なのに勝ち負けを競うのか?というのは日本人にとっては分かりにくいことかもしれないが、このコンペがPorto Ricoのマラカトゥの質を引き

上げ続けてきたように思う。毎年テーマを一新し新曲を作る。その新曲がどんどんPorto Rico傘下のリオやサンパウロのチームにも浸透し、マラカトゥ全体の曲数が増えていく。この循環をずっと見てきたように思う。

## リゾート地ポルト・デ・ガリーニャスにて

Porto Rico傘下のチームとして、今年ポルト・デ・ガリーニャスにあるAlfaias da Praiaというグループにも接点を得た。Porto Ricoのような大きなチームはNação(共同体)と呼ばれ、カンドンブレの教会を兼ねているが、マラカトゥを音楽として捉えライブイベントに演奏しに行く比較的小さなまとまりをGrupoと呼ぶ。ブラジルのカーニバルは全国各地で同時多発的に進行しているが、地方の小さな街でもそこを拠点にした音楽グループが伝統的かつローカル色の強い演奏で聴衆を楽しませている。

ポルト・デ・ガリーニャスというリゾート地ならではのラグジュアリーなホテルで、王侯貴族を模した衣装での演奏と行進は、写真を撮影する者にとって圧巻の場面だった。演奏の合間、グループのリーダーが聴衆である富裕層を前に「アフロブラジル」という単語を繰り返し用いて解説しているシーンがとても印象に残った。京都に住んでいればみな祇園祭に積極的に関わっているわけではないように、マラカトゥも多くの人に認知されているわけではない。奴隷をルーツとする先人がつくりあげてきた伝統の裾野を拡げていく地道な取り組みを垣間見るひとコマだった。

## コミュニティとしてのマラカトゥ

そしてNaçãoにせよGrupoにせよメンバーを家族として捉えるコミュニティとしての役割が相当に強い。

実はこれが今の日本においてもっとも欠け、つくり得るのが困難なものだと感じている。マラカトゥは趣味ではなくライフワークだ。ある時は仕事より優先さ

れることがある。日本では趣味やサークルの集まりは目的が終われば現地解散、もしくは居酒屋に行って打ち上げ、というのが定型だろう。

一方、ブラジルでは集まればまず食事を確保する。バスで遠方に巡業に行く際はみんなの分の弁当を用意したり、共有のクレジットカードを順番に回して屋台で軽食を買う。あるいはホテルでピュッフェを用意してもらったり、リーダーの家に戻りみんなで食事を作ったり…。まずはお腹を満たすことが人間の根源の幸福感であることを軸にしている。そしてたくさん会話をする。チーム内で恋人ができたり、結婚に至ることが多いのはその結果だろうと思う。

私自身が今回の旅で自覚したことのひとつが、一体何の写真を撮りたいのか、という答えだった。日本ではコロナ禍が人間同士のコミュニケーションに致命傷を与えたと思う。もはや取り戻すことが不可能と思うくらいに、顔を見合わせて本音で語り合うことなどなくなってしまった。今回の旅でただただジャレ合い、悪ふざけをし、食事をするシーンをたくさん写真に収めた(そして、ついでのようにカーニバルのシーンを撮った)。日本人が失ってしまったもの、或いは日本人が撮らせてくれなくなったものを拾い集めるように地球の反対側へ向かったのだと自覚した。私が撮りたいものとは、多幸感に溢れた人間たちのドキュメント。2024年冬、「ブラジル」に行かないための思いつく山のような理由を押しつけて向かった潜在的な答え。きっとその続きを求めて来年も地球の反対側へ向かうのだろう。



▲演奏後のリーダー宅での夕食

# カシャッサの聖地 サリーナス



宿口 豪  
(Bar Blen blen blen 店主、  
J.S.A ソムリエ)

## 世界に誇る高貴な酒、カシャッサ

カシャッサ——言わずと知れたブラジルを代表するサトウキビの蒸留酒だ。かつて“ピンガ”という俗称をもって“飲んだらヤバイやつ”というレッテルを貼られていた時代はもはや遠い昔の話。近年は正しい理解——カシャッサには「インダストリアル」と「アルテザナル」の2種類があり、特に後者は酒質も高くブラジルの歴史とは切っても切り離せない高貴な酒であるという事実——がブラジル国内はもちろん世界中に広がり、ファンを増やし続けている。筆者もそんなカシャッサ・アルテザナル(クラフト・カシャッサ)に魅せられ、あちこちの蒸留所やブラジル最大のカシャッサ・イベント「Expo Cachaça」などカシャッサにまつわる場所へ頻りに足を運ぶようになった。その中でも特別な思い入れがあるのがミナス北部の小さな街、サリーナスだ。街の周辺には50を超える大小たくさんの蒸留所があり、毎年7月には『Festival Mundial da Cachaça de Salinas』という祭典が3日間に亘り開催され、普段静かな街が世界中のカシャッサ・ファンで溢れる。

## サリーナスへ

BH(ベロオリゾンテの愛称)のコンフィンス空港からミナス北部の街モンチス・クラロスまで1時間飛び、そこから更にバスで4時間。もしくはBHからTransnorte社のバスで北上すること10時間。パイア州南部のポルト・セグーロとほぼ同緯度で、大西洋岸から500km内陸に位置する人口僅か5万人の小さな街である。1年を通して平均最高気温は30℃前後の半乾燥気候となっている。

街の入口に小さなホドヴィアーリア(バス・ターミナル)があり、その先がセントロ。ここではMuseu da cachaça(カシャッサ・ミュージアム)を訪れておきたい。サリーナスの歴史やかつて使われていたサトウキビの搾り器やアランピック(蒸留器)などの展示は必見。最後に試飲もできる。

主役たるカシャッサの蒸留所はセントロには無く、遠く離れた起伏豊かな大自然の中に点在する。ホテルは中心部にしかないので、蒸留所を訪れる際にはタクシーをチャーターするなり足の確保は必須である。さて蒸留所でまず紹介しなければならぬのが北西部NovorizonteのFazenda Havana(ハバナ農園)だ。1946年にAnisio Santiago アニジオ・サンチアーゴという人物によって設立されたのだが、彼こそがサリーナスを聖地たらしめた張本人である。

## Anisio Santiago の Fazenda Havana

かねてよりカシャッサは家庭で自家消費用として作られていたが、アニジオは評判のよかった自分のカシャッサに農園名である「Havana」と言うブランド名をつけ限定生産品としてバルク販売を開始する。昔トラック運転手だった彼はパイア南部や遠くの地域にも元々知り合いが多く、シヴォーレー・ロードマスターで遠方にも赴き販売したため、瞬く間にHavanaの名は知られることとなった。そして1960年代には他のサリーナスの生産者も後に続くべくアニ

ジオから生産方法を学び、それぞれ好評を博していく。こうして元来サトウキビ栽培に適した土壌、気候である事に加え、アニジオによる才覚と尽力で優良生産者がこの地に増えた事により、1970年代にサリーナスは地域全体のブランド化に成功したのである。その後Havanaは有名になり過ぎたことによりキューバ・ラムのHavana Club社から訴えられ、2011年まで“Havana”という名称が使えなくなった(その間は『Cachaça Anisio Santiago』として販売)のだが、結果として彼の名声を更に高める事になった。1990年代に入るとPró-Cachaçaと呼ばれる州の施策によりサリーナスを含めたミナス全体でのカシャッサの生産者が増加、2001年にはAPACS(Associação dos Produtores Artesanais de Cachaça de Salinas)が設立され、サリーナスのカシャッサの地位は確固たるものとなった。

## Havana に続いた名生産者たち

『Havana』に続いた名カシャッサをいくつか紹介しておこう。Novorizonteから更に北上したNova Matronaにある『Canarinha カナリーニャ』はアニジオの甥、Noé Santiagoが始めた蒸留所だ。現在はその息子Eltonとファミリーが伝統的な方法で造り続けている。ちなみに筆者のフェイヴァリット・カシャッサだ。個人的にとっても仲良くさせてもらっていることを差し置いても、クオリティーの高さにはため息が出ない。

そして1960年代にHavanaに続いた『Piragibana ピラジバーナ』や『Asa Branca アザ・ブランカ』、『Sabá サビアー』などの高品質生産者の中でも最も有名なのが東部に位置する『Seleta セレタ』であろう。サリーナスの中ではNovorizonteにある『Cachaça Salinas カシャッサ・サリーナス』と並ぶ生産量の大きさを誇り、Dornaと呼ばれる巨大な木樽が並ぶ様は圧巻だ。日本でも買えるので是非『Seleta』と『Boazinha』を比較試飲してカシャッサの最大の特徴とも言える木樽のニュアンスの違いを感じて欲しい。

さて先述の『Festival〜』は生産者の声を直に聞いたり、一度にサリーナスのカシャッサを試飲できる貴重なイベントだ。ここでしか入手できないレアなカシャッサもたくさんある。昼は蒸留所へのツアー、夜は音楽ライブも。初めてのサリーナスはこのフェスタをお勧めする。

最後になるが、そもそも「カシャッサとは何か?」等ご興味ある方は是非「日本カシャッサ協会」や「カシャッサ・カウンスル・ジャパン」の門を叩くことをお勧めする。また筆者の経営するBar Blen blenではサリーナス産を始め膨大な量のカシャッサを用意しているので、是非気軽に足を運んでいただきたい。この素晴らしい蒸留酒を1人でも多くの方と楽しくシェアできることを願ってやまない。



## 新刊書 紹介



### ◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆

#### 『新版 地図で見るラテンアメリカハンドブック』

(O・ダベヌ／F・ルオー著、太田佐絵子訳)

欧州視点によるラテンアメリカ概説本。著者はフランスの政治学博士。地域的役割を越えて世界の中での居場所を見つけようと苦闘しているラテンアメリカについての便利なハンドブックであるが、歴史の理解がなんとも表層的だ。P154-157「ブラジル—脆弱なグローバル・プレーヤー」では国連プロパリーの国際外交官ヴィエイラ・デ・メロをブラジルの外交官と誤認したうえでブラジル外交政策の一環として記述している。お粗末な基本的ミスだ。(原書房 2024年2月 172頁 3,200円+税)

#### 『果樹とはぐくむモラル』(吉村竜著)

サンパウロ州ピラール・ド・スールは州都サンパウロ市から西へ140kmほど入ったところに位置する、人口3

万ほどの中堅都市。市人口の3%ほどを占める日系人の同地区への移住は1945年以降で、ブドウ、柿などの果樹栽培に従事してきている。過去70年間に起こった市場のネオリベリズム化、日系農協の改廃・再編、柿の選択といった事例を人類学的にフィールドリサーチした論考である。副題は「ブラジル日系果樹園からの農の人類学」。(春風社 2024年1月 312頁 4,400円+税)

#### 季刊民族学 187

##### 『特集 境界をゆきかう日系人』

中牧弘允「われら日系人、新世界と日本社会をゆきかう」を巻頭論文として、小嶋茂「『日系人』の変遷とnikkeiの意味」、アンジェロ・イシ「『終活』や「総括」に挑む日本在住の日系人たち」、河上幸子「三尾とカナダをめぐる移民文化の資源化と次世代育成」、佃陽子「南カリフォルニアの「日系企業城下町」」などの論考が11本も収録されている。世界全体で400万人ほどとみられる日系人が国境を越えて活躍している諸相を複眼的に捉えている。(千里文化財団 2024年1月 104頁 税込み2,750円)

##### 『黒人の歴史』

(ネマータ・プライデン他著、沢田博訳) 人類の「出アフリカ」から始まり、ガー

ナ帝国、ソンガイ帝国、マリ帝国、ヨーロッパ人の到来、大西洋奴隷貿易、ブラジルにおけるキロンボ、逃亡奴隷の抵抗、南北アメリカにおける奴隷制廃止、米国における奴隷反乱、ネルソン・マンデラと反アパルトヘイト闘争など98の物語が地図や図版とともに語られている。黒人の歴史を総合的に扱った本書を読むことでブラジルの歴史の理解を重層的に深めることにもなる。全体を捉えるには有用な一冊。(河出書房新社 2023年7月 336頁 5,400円+税)

##### 『第二の人生=流氷に乗って来た白熊+童話集』(有水博著)

民間企業でポルトガル語通訳3年、外務省17年、大阪外国語大学教授19年、近畿大学教授5年という多彩な人生を過ごした著者による回想録第二弾。主に大阪外大時代の授業内容や学生たちの事情、学会での発表、書き上げた論文などについての短い文章が続く。大学改革の結果、大阪大学が大阪外大を吸収してしまった経緯への批判も。後半部は童話風エッセイが7本収められている。貴重な体験の証言集であるだけに文章が表層的なのが残念だ。(文芸社 2023年1月 130頁 600円+税)

## !!「ブラジルあれこれ」!!

### インバウンドガイド養成コース

当協会主催で1月から3月まで実施された「インバウンドガイド養成コース(関西編)」に参加した。このコースは、ポルトガル語の全国通訳案内士の資格を持っている人やこれから資格を取得してガイドの仕事をしたい人向けのコースだ。

京都、奈良、大阪の観光スポットを巡るという設定で、実際にグループ客に対しガイドを行う際に必要となるポルトガル語の表現を学んでいく。自身も現役のガイドとして活躍される協会事務局の池聡子さんによる臨場感あふれる課題設定のおかげで、かなり実践的な内容となった。

参加者は、ポルトガル語のブラッシュアップや資格取得に向けた学習など、それぞれ目標を持って臨まれていた。筆者の場合は、実際のガイドの仕事の際にブラジル人向けに説明しているポルトガル語が、ブラジル人にとってすんなり受け入れられる、理解しやすいものであるかということを確認したいという思いがあり、コースに参加した。

例えば、日本の「神様」はどう表現したら、ブラジル人にとって一番しっくりきてわかり易いのか、というようなことも授業の中で議論した。「deuses」、「deidades」、「divindades」とどれも正しい言葉だと思うが、どれが良いのか、ネイティブの講師にコメントを求めた。これまで、けっこう独りよがりの表現を使ってきたことも多いと反省しており、その意味

で、有意義な授業体験ができた。

話変わって、2月26日に、東京都の主催でおこなわれた、「通訳ガイド×観光・人材関連企業マッチング交流会」に参加した。本来は、ガイドが関連企業に対し売り込みをする場であるが、そこに参加していた旅行代理店、人材派遣会社計20社ほどに、ポルトガル語ガイドの需要状況につき照会してみた。

多くの会社が、ポルトガル語の案件を扱っていると答えるとともに、ガイドが見つからず、案件の実施を見送るケースがかなりあると述べていた。現在最も関心があるのはポルトガル語ガイドの確保と述べていた企業もあった。

最近は、特に春や秋のトップシーズンを中心に、それ以外の時期も含め筆者のところにもいろいろな旅行会社から、仕事の依頼がある。

昨年10月以降、ブラジル人短期滞在者に対する査証免除措置が取られており、その影響とも考えられるブラジル人旅行者の増加が見られ、その傾向は今後も続くのではないかと思われる。

読者の皆様の中にもブラジル人をガイドしてみたいと思っている人もおられると思う。この機会にチャレンジしてみてもどうだろう。(MK)

# カルテルに対する 制裁金算定ガイドライン



柏 健吾  
(TMI 総合法律事務所  
日本弁護士連合会在ブラジルで勤務)

## 1. はじめに

ブラジルにおいても、競争法（2011年法12529号）違反であるカルテルに関する捜査は継続的に行われている（2021年は36件、2022年は14件の新たな調査が開始された）。カルテルに関する調査及び訴追はブラジルの公正取引委員会である経済擁護行政委員会（Conselho Administrativo de Defesa Economica。以下「CADE」という）が行う。CADEは、カルテルに対する行政手続やリニエンシー契約に関して、その透明性を確保するため各種のルールやガイドラインを制定してきたが、2023年9月に、「Dosimetria de Multas de Cartel」（直訳すると「カルテルの制裁金分析」という新たなガイドライン（以下「本ガイドライン」という）を公表した。本ガイドラインは、カルテルに対して課せられる罰則の決定方法の透明化を図る目的で、2012年1月から2022年12月までの間にCADEによって下されたカルテルに対する罰則事例を分析しまとめたものである。本ガイドラインは罰則のうち主に制裁金の算定方法について規定しているが、どのような制裁金が課せられ得るかは、カルテルが発覚した会社がどのような対応を取るか（行政手続で争うか、リニエンシー契約を締結するかなど）を検討する上で重要な指標になる。本ガイドラインには法的拘束力はないものの、重要な指標になることは間違いない。そこで、本稿では本ガイドラインの概要を解説する。

## 2. カルテルに対する 制裁金算定のステップ

カルテルに対する制裁金に関して競争法は、「カルテルの対象となった企業活動分野における行政手続開始前の直近の会計年度の違反者、グループ又はコングロマリットにおける総売上高の0.1%～20%の範囲内で決定される」と規定している。かかる制裁金の算定について、本ガイドラインは、CADEが一般的に以下のステップを経ていると指摘している。

- ①行政手続開始前の総売上高及び適用される基準率の決定
- ②違反者の状況に応じた制裁金の加減要素の決定
- ③制裁金が法律上の範囲内か否かの検証

## 3. 行政手続開始前の総売上高及び 適用される基準率の決定

### (1) 総売上高の決定

本ガイドラインは、「違反者、グループ又はコングロマリットにおける総売上高」に関して、原則として違反行為を行った会社の売上高を基準とすること、つまり、グループ又は

コングロマリット全体の売上高を基準とすることは例外であると規定している。具体的な適用はケースバイケースで判断されるが、本ガイドラインは、たとえば、売上高が非常に少ないペーパーカンパニーを介してグループ会社全体の利益になるような行為をした場合を例外事情としている。

また、「行政手続開始前の直近の売上高」や「カルテルの対象となった企業活動分野」（企業活動分野はCADEのルールで144に分類されている）についてもCADEが状況に応じて別の形で適用していることに言及している。たとえば、行政手続開始前の直近の売上高がない場合（すでに事業停止しているようなケース）には違反行為が行われた最後の年の売上高が基準とされることがあることや、国際カルテルのケースで違反者がブラジル国内における売上高を正確に把握していない場合にブラジルにおける売上高を推量する方法に言及している。

### (2) 制裁金の基準率

カルテルに対する制裁金は算定基準額（上述の総売上高）に一定の率を乗じることで算出される。本ガイドラインはこの率についても言及している。具体的には、入札カルテルについては17%（最低14%）、ハードコアカルテルについては15%（最低12%）、その他の形態のカルテルについては8%（最低5%）が基準となるとしている。

その上で、本ガイドラインは、長期にわたり違反行為を行っていた者は違反行為に限定的に参加した者よりも厳しい処罰を受けることや、違反行為への関与の度合いが強い違反者に対しては基準率が加重されることにも言及している。たとえば、会議の日程調整や関連する文書の作成などにおいて重要な役割を果たしている場合が加重要因となっている。実際に行う行為を実行した自然人に関しては、CADEは、会社の株主や取締役などの重要な地位にいる者が一般の従業員よりも強く関与していると判断している。その他の加重又は軽減事由としては、違反者の善意（違反行為後にその影響を最小限に抑えようとしたかなど）、違反者が得た又は得ようとした利益、既遂か未遂か、消費者や市場への影響の程度、違反者の経済状況（倒産手続中か否かなど）、再犯か否かなどが考慮されている。

## 4. 制裁金が法律上の範囲内か否かの検証

カルテルを含む競争法違反の行為に対する制裁金について競争法はいくつかのルールを定めている。具体的には、上述のとおり、「総売上高の0.1%～20%の範囲内で決定される」や取締役などについては「会社に課せられた制裁金の1%～20%」などのルールである。制裁金は当然のことながら競争法で定められたルールの範囲で決定される必要があることを本ガイドラインは確認的に言及している。

# ブラジルにおける キャッシュ・コンバージョン・ サイクルの動向



天野義仁  
(KPMG  
ブラジルジャパン  
デスク責任者)



三上智大  
(KPMG ブラジル  
ジャパンデスク  
マネージャー)



フランスコルメンテ  
(KPMG ブラジル  
アドバイザー  
パートナー)

## はじめに

ブラジルでは2021年から2022年にかけて大幅な政策金利の上昇が中央銀行より遂行されており、2023年下期より暫時的に金利の引き下げが実施されているものの依然として高水準で金利が推移している。現地で活動する企業に対しては、特に資金繰りの面でマイナスな影響を及ぼしている。これを裏付けるように、2023年の倒産件数は前年比で13.5%増加しており、各社とも原材料などの仕入代金を払ってから製品を販売して現金を回収するまでの期間を指すキャッシュ・コンバージョン・サイクル（CCC）について細心の注意を払っている。

こうした背景のなか、KPMG Brasilでは、ブラジル所在の160社に対する調査を実施し、14のセクター（通信、食品、オイル&ガス、化学、教育、上下水事業、鉱業、リテール、ヘルスケア、コンシューマー、自動車、製造業、穀物、テクノロジー）におけるCCCの動向について記載したレポートを公開した。本記事では、当該調査の内容について簡潔に説明したい。

## 調査結果の概説

	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023/1Q
売掛金の平均日数	37	35	35	41	35	32	31
在庫の平均日数	54	55	59	61	66	60	62
買掛金の平均日数	55	55	60	68	60	53	51
CCCの平均日数	36	35	34	34	41	39	42

上図は、2017年から2023年第1四半期までの売掛金、在庫、買掛金及びCCCの平均日数を示したものである。全体として、パンデミック期間中となる2020年及び2021年は平均日数が増加したものの、パンデミックが終息に向かった2022年以降は（在庫を除き）パンデミック以前の水準に回復している。

売掛金については、2023年第1四半期においてはパンデミック以前より日数が減少しているが、理由として、経済の不透明感や金利の高止まりにより、企業による顧客への与信枠の条件の引き締めが主要因として挙げられる。

在庫は未だパンデミック以前の水準までに完全に回復しておらず、企業の売上減少による滞留に加え、一部セクターにおいて引き続きサプライチェーンの回復が遅れていることにより、原料不足リスクを回避する目的での在庫積み増しが主要因として考えられる。

買掛金の日数減少は、売掛金と同様、経済の不透明感や金利の高止まりにより、仕入先からの支払条件の引き締めが主要因として挙げられる。加えて、パンデミックによるサプライチェーンの混乱を経験したことによって、多くの企業は海外調達も視野に入れたサプライヤーの多様化を模索していることも一要因と考えられる。

## セクター別の動向

次に、セクター別のCCCについて参考までに一部掲載する。全体的にセクターによって平均日数が大きく異なっており、セクターのビジネス環境や商慣習によって大きく左右されると考えられる。

2023年第1四半期	全業種平均	食品	鉱業	化学	リテール	自動車	製造業
売掛金の平均日数	31	20	28	47	61	53	63
在庫の平均日数	62	49	91	56	106	83	109
買掛金の平均日数	51	49	59	31	93	47	49
CCCの平均日数	42	20	60	72	74	89	123

## 運転資本改善のための施策

企業の運転資本の改善のための施策を考える際、企業が置かれているビジネス環境やセクターの商慣習及び状況を勘案しつつ検討する必要があると思われるが、一般的に考えられる改善策について下記に紹介したい。

売掛金に関して、未入金の効果的な回収が重要と言える。そのためには、支払の履歴とリスクに基づいて顧客を分類し、支払い延滞を繰り返す顧客に対しては、請求書の支払期日前にリマインダーする等、積極的に対処する。また、滞納を繰り返す顧客に注力し、期日通りに支払ってもらうためのインセンティブを与えることが考えられる。さらに、顧客との取引条件を交渉するに当たり、営業及び財務部門の意見を取り入れた社内ポリシーを策定することが大切であると言える。

買掛金について、サプライヤーへの支払い日を統一する等、プロセスを効率的に進めることが考えられる。また、資材部に対してはサプライヤーとの交渉を行うための社内ポリシーの策定、各社と締結中の契約書を条件ごとやサプライヤーカテゴリーごとに管理するツールの導入、競合他社とのベンチマークの実施を実施することで自社のギャップを認識し適切な対応を講ずる、といった対策が考えられる。

上述の改善策に加え、当該改善策が適切に検討・運用されているかを確認することも重要であり、これらの改善策の効果を計るためのKPIの設定及びモニタリングを実施することが必要であろう。また、社内におけるキャッシュマネジメントに関する意識を醸成するため、運転資本に係るプロセスを担当する役員を選定することや、優れた財務規律をもたらしたマネジメントやメンバーにインセンティブを与える、といった施策も一考の余地があると言えるだろう。

## 最後に

先に触れた通り、ブラジルはキャッシュマネジメントがことさら重要な国と言える。政策金利は引き下げの方向に向かっているものの、今後の経済状況によっては再度引き上げへと舵を切る可能性も排除できず、企業にとっては予断を許さない状況である。また、サプライチェーンの混乱が今日においても完全な解消には至っていないが、増加する倒産件数は企業にとって顧客・サプライヤーの両面でのリスクを増加させる要因となっている。当地で展開する企業においては、取引先の財政状況に気を配りつつ、自身のキャッシュマネジメントの改善に向けた施策を講じることが事業を強靱化する重要な一手と言えるだろう。

参照：Seu Capital de Giro está Trabalhando Bem o Suficiente? - KPMG Brasil



# 短編映画『ムイト・プラゼール』の 朴 正一監督に聞く



【ブラジル特報】編集部



## 『ムイト・プラゼール』の見どころ

2022年に公開された社会派短編映画『ムイト・プラゼール』は、在日ブラジル人の教育現場における生徒や関係者たちの葛藤・苦悩の現実を在日コリアンの監督が映像化した、ノンフィクションに近いドラマ作品である。ストーリーは、都内の高校の「国際交流部」の部員たちが「善意の国際交流」の相手として在日ブラジル人高校生の教育現場（ブラジル人学校）を選択したところから始まる。遠足気分ノンシャランな部員たちは、彼らが出会った在日ブラジル人高校生たちの厳しい境遇を知って動揺し、悪意ない発言「日本語お上手ですね」が如何に差別的な発言であるかを、彼らからの激しい反発をくらって、ようやく認識する。この「国際交流」という部活の顧問・金本先生が在日コリアンであることもこの映画の「目玉」であり、彼女が自分自身の体験も交えながら彼らと語り合っていくシーンは、素直に観客の心を揺さぶる。脚本・編集・監督すべてを担ったパク監督という総合コーディネーターの力量のおかげ



で、映画出演は初めてという素人俳優たち（ブラジル人学校の在校生や卒業生）の演出量は想定以上であったと断言してもよい。

この佳作は、いくつもの映画祭で入賞（SKIP シティー D シネマ国際映画祭短編観客賞、フィラデルフィア・アジアアメリカン映画祭入選など）したことからわかるように、玄人筋からは高い評価を受けた。商業的公開にあたっては、歌手クリスタル・ケイ、小野リサ、マルシアといった方々からコメント、推薦の言葉をいただくことができたが、観客動員数は限定的になってしまったのはなんとも残念である。

在日ブラジル人子弟の教育状況をいささか承知している当方としては、この作品をより多くの人たちに知ってほしいと考え、忙しい朴監督のスケジュールの合間をみて1時間半ほど話を伺った。

## 朴監督とのインタビュー要旨

**Q**（編集部）：2022年から2023年にかけて池袋、大塚、栃木、愛知、大阪、神戸、横浜などの名画座やミニシアターで一般公開されたが、反響は如何であったか。

**A**（朴監督）：元々は商業公開を想定していなかったが、映画関係者からの熱心なお誘いもあって商業公開することにした。ただ、本作は31分の作品なので、これだけでは時間的に短すぎるため、この映画の企画から制作までコミットしてくれたヒデキさんとのインタビュー編を作成し、計1時間の作品として上映した。

池袋では200名以上、横浜でも100名ほどの観客が本作を見てくれたが、地方では数十人に満たなかったりと、観客動員という点では厳しかった。また、自分としては、多くの在日ブラジル人の方々に見てほしいと思っていたが、この点でも限定的になってしまった。

**Q** この作品は、監督が脚本を書いたうえで制作費はすべて自費で賄われたと聞いたが。

**A** その通りだが、出演者は皆ノーギャラでやってくれたので、出費は交通

費、レンタカー代、機材代などの実費だけで済んだ。撮影は群馬県のブラジル人学校で行ったが、前日から合宿のように泊まり込んでキャスト同士の交流をやってもらってからリハーサルに臨んだので、低コストで制作できた。

**Q** 脚本は監督ご自身で書かれたが、撮影中にアドリブに切り替えたりはあったのか。

**A** 私がパナソニックの映像制作講座の講師として働いた時、初めて在日ブラジル人と知り合い、彼の縁でこの映画の実質的監修者といえるヒデキと意見も情報も深く交換することとなり、そこで学んだことを脚本化した。実際の撮影現場では、アドリブも結構採用したりしたが、概ね脚本の通りに映画化した。その意味では、出演者全員による共同制作に近いといってもよい。

**Q** 在日コリアンの朴監督からみて、在日コリアン社会と在日ブラジル人社会の共通点や相違点はどうか。

**A** 在日外国人という点では共通だが、歴史の長さが違うこともあるのだろうが、在日ブラジル人たちは在日コリアンと比べると、日本社会とのつながりが少ないように思う。もっとも、在日コリアンである私自身、在日コリアン団体とか関連協会とかとの関係は全くないし、在日コリアンの友人も少ないので、在日コリアンという意識はあまりない。むしろこの短編映画を制作したおかげで、様々な社会的弱者の人たち、ろうあ学校、知的障害者施設などへの関心が深まった。実は、自分では初めての在日コリアン社会を扱った作品を制作中だ。

**Q** 今後の商業公開の予定は？ またDVD制作が決まっていると聞いているが？

**A** 2024年度は映画館での公開は今のところ予定していない。

DVDは制作中で、販売、配信開始は5月3日（金）の予定である。配信サービスが決定しているところは、UNEXT、ビデオマーケット、Amazon、HULU、FOD、JCOM、である。

## ブラジルでの学生生活

加藤七海（元ブラジル留学生）

2020年の2月初旬、私は留学のためにブラジルのクリチバへと旅立った。それは私にとって、初めての海外での長期滞在となる予定だった。しかしコロナウィルスによるパンデミックの影響で、大学から帰国指示がでてしまい、2か月の滞在となった。実際に授業が始まるのは3月だったが、生活に慣れるため、またカーニバルのために早い段階からクリチバに滞在していた。準備期間として考えていた1か月が、私のブラジルでの生活の半分を占めることとなり、かつパンデミックによる閉校があったため、私の学生生活はわずか1週間であった。

そのわずかな期間にあっても、大学生活の中で日本との違いを多く感じた。一番初めに気付いたことは、授業時間の幅の広さだった。一番早い授業は朝の8時に始まり、遅い授業だと22時を過ぎるものもあった。ブラジルという国に対しては時間におおらかな印象を抱いていたこともあり、最初は授業開始時間の早さを意外に思ったが、学生たちと交流をする中で、働きながら学ぶ学生が多いからだと気が付いた。自分の生活に合わせた履修を組めることが影響しているのかはわからないが、年齢層も幅広かった。

またその大学の学食は、学生以外も利用することができるのだが、その大学の学生証を提示すると半額以下の価格で食べることができた。メインのおかず以外はバイキング形式のランチで、日本円にして、なんと40円。朝昼晩の3食すべてを学食で食べても100円程で食べられることに大変感動した。

授業については1週間しか受けていないため、正直なところ違いを感じるほど気付きを得ることはできなかった。ただどの学生も本当に親切にしてくれ、英語を勉強している学生は積極的に英語を使いながらポルトガル語を教えてくれた。私が英語で話しているのにポルトガル語の単語が出てきてしまった時には、「Portugish (Portuguese と English を組み合わせた造語) は私もよく話してしまうよ」と言いながら私との会話を楽しんでくれた。

決して長くないブラジルでの学生生活ではあったが、ブラジルならではの生活を体験することができ、とても濃い2か月間を過ごすことができた。帰国してから4年経つが、またブラジルに行きたいとの思いは日に日に濃くなっている。

## ジャーナリストの旅路

### ブラジルは子育てがしやすい

軽部理人  
（朝日新聞サンパウロ支局長）

「ブラジルは子育てがしやすい」

サンパウロに赴任した2年前、同僚や知人から幾度となくそう言われた。治安が悪いイメージが強かったため半信半疑だったが、今はその意見に強くなっている。

子どもは3歳半と1歳半。妻と育児でてんやわんやの日々を過ごしているが、そんな私たちの強い「味方」になってくれるのが、ブラジルの人たちだ。

一番助かるのは、子連れでレストランを利用する時。店員が笑顔で子ども用の椅子とお絵かきセットを用意してくれる。ちょっとした高級店でもだ。子どもが騒げば、隣の席の客が手を振ってくれたり、「ボニチーニョ（かわいい）」と言って頭をなでたりしてくれる。

コーヒー店で子どもを抱っこしていると、全身タトゥーだらけの若い男性店員が笑顔であやしてくれたこともある。私が住むマンションの管理人は大人には無愛想だが、子どもには満面の笑顔を見せる。フェイラ（市場）では、ベビーカーで寝ている子どものケープを外してのぞき込むお年寄りまでいた。これには少しだけ開口したが……。

ブラジルで子どもは、「神様の贈り物」だとされる。知り合いのブラジル人はこう語る。「社会全体で子どもを育てる意識が強いんだ。そんな環境で育っているから、ブラジル人

が子どもに優しいのは当たり前だよ」

翻っての日本はどうか。

昨春、スープ専門店の「スープストックトーキョー」が赤ちゃん向け離乳食の無料提供を始めると発表したところ、「赤ちゃんを優遇している」などと批判的な声がネットを中心に高まった。また、満員電車では子どもの泣き声に周囲から舌打ちが聞こえたなどの話も枚挙に暇がない。

2022年の日本の合計特殊出生率は1.26。1947年以降の統計で、過去最低と同水準に落ち込んだ。様々な要因があるが「社会全体で子どもを育てる」意識が広がらないと、少子化はますます悪化するだろう。

だが、出生率で見るとブラジルも同じ悩みを抱えている。肌感覚だと、紙オムツや玩具の値段は日本の1.5倍。公立学校は無料だが教育レベルの低さが指摘されるため、中流世帯以上は日本よりも学費が高い私立に子どもを通わせる。子どもに優しいブラジルだが、子育てにかかる費用の高さは、決して優しいとは言えない。2021年の出生率は、近年では最低となる1.64だった。

若い世代が子育てをしたいと思える真の国の姿とは。時々、そんなことを考えさせられる。



ニッケイ新聞より

## 追悼：醍醐麻沙夫さん ジャズピアニストから作家へ、 ブラジル移民史の“語り部”

岸和田仁（「ブラジル特報」編集人）

サンパウロ在住作家の醍醐麻沙夫さん（本名、広瀬富保）が3月20日逝去された。享年89。醍醐さんは、開高健のブラジル釣り紀行『オーバ』（初版1978年）の仕掛け人＆現地案内人として有名になったが、純文学タッチで書かれた醍醐初期作品群を通じてブラジル日本移民の歴史を学んだ筆者としては、ミュージシャンから画廊経営や日本語教師、さらにはフッコ（スズキ）釣り専業を経て作家に転じた醍醐さんの人生の軌跡を振り返ることと哀悼の意を表したいと考えるものである。

### 府中にて

2015年12月某日、府中刑務所のすぐ近くにある某大学に出かけることになった。その大学を含む三大学共同の「世界展開力強化事業」という中南米留学制度に関する打合せのためであったが、ミーティングが終わって、ヒルメシでもということになって正門前の寿司屋に入った。年末で仕事納めの日でもあったので、ビールもたしなみながらブラジルに関して歓談していたら、店のオヤジが“参入”してきて、座がさらに盛り上がることになったのだが、その時、オヤジから、いきなり“ヒラノウンベイ”の話が出て面喰らってしまった。

いうまでもなく平野運平は、1908年の笠戸丸移民に付き添った通訳5人男（全員東京外語スペイン語卒）の一人で、民間の日本人植民地としては第一号の平野植民地を苦闘の末切り開いたが、志半ばにして34歳で病没した先駆者だ。ブラジル日系移民史において必ず語られる快男児であるが、寿司屋のオヤジが何故、平野について知っていたかという点、醍醐麻沙夫『森の夢』と北杜夫『輝ける碧き空の下で』を読んだからであった。

### 佳作『森の夢』 （サンパウロ新聞社1979年、冬樹社1981年）

この寿司屋のオヤジが語った『森の夢』は、開高健のアマゾン現地案内を終えてから醍醐さんがサンパウロ新聞に連載した中編小説である。通訳5人男のなかで唯一日系移民達から信頼され、入植地での脱耕問題を切り抜けた平野運平が、1915年8月、希望者を募ってリンス近郊（サンパウロ市から北西約400km）の湿地を開墾して平野植民地を開設したものの、初期段階でマリアアにやられ入植者の半数以上が亡くなる、という実際の悲劇的史実に沿ったドキュメンタリー小説である。その写実的といえる文体で書き綴られた平野運平の壮絶な生き様に多くの読者は心打られたのであった。

筆者もこの『森の夢』初版本を入手して夢中になって読み進んだことで平野運平という人物を知ることが出来たのだが、長編二部作『輝ける碧き空の下で』を書き上げた北杜夫も高く評価している。そのあとの結語部分を引用してみよう。

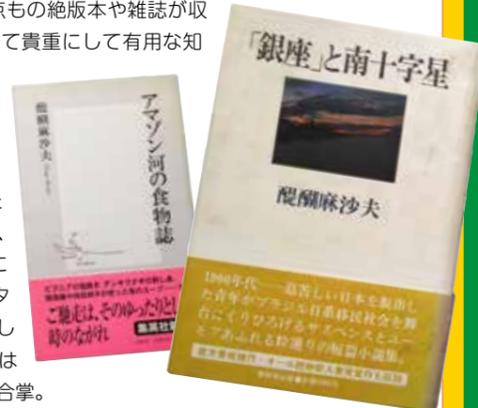
「『森の夢』は平野植民地についての、最初の克明なドキュメント小説である。平野植民地については他に少量の資料しかないため、私はこれを大幅に借用せざるを得なかった。また『森の夢』がすぐれた小説であるだけに、或る部分はその描写を乗り越えることができず、どうしても模倣してしまったというのが実状である。それを快く許して下さった氏に厚く感謝を捧げる。」

### ミュージシャン、画廊経営、 専業釣り師から作家へ

学習院大学文学部で美学を専攻した醍醐さんの学生時代は、銀座でクラリネット奏者というアルバイトや安保反対のデモ参加などで忙しい日々を過ごしていたが、卒業後すぐブラジルへ移住する。楽器ならなんでもOKというセミプロ級の腕前のおかげで、サンパウロではジャズピアニストとして生計を立て、サンバもサノヴァも自在に対応していた数年間の後、玩具輸入商社の営業マンもやれば、画廊やファッション店経営でにわか成金になったりしていた時、出会ったのが、創刊間もない移民文芸雑誌「コロニア文学」であった。文学に開眼し作家に転進してからは、ミュージシャン体験を小説化した『夜の標的』（1975年直木賞候補作）や、営業マン時代を小説化した『銀座と南十字星』（オール読物新人賞受賞）などの中間小説から移民小説、推理小説、ノンフィクション、釣り紀行、エッセイ集まで精力的に書き続けることとなり、のべ20冊以上の本を刊行している。

### デジタルサイト「ブラジル移民文庫」は 貴重な知的遺産

晩年の醍醐さんが、心血を注いだのは日系移民史、特に戦後のカチマケ抗争の記録であり、デジタルサイト「ブラジル移民文庫」（改訂版2012年）の開設、入力、改訂であった。このデジタルライブラリーには、ブラジル史、移民史、コロニア小説選集、芸能史関連など160点もの絶版本や雑誌が収録されており、極めて貴重にして有用な知的遺産である。かつては戦前移民一世から「農業移民の苦勞を知らない新移民」と揶揄された醍醐さんだったが、ブラジル日系移民に関する濃密なデータベースを一人で構築した。この偉業を我々は忘れてはならない。合掌。



# SAUDADE DO BRASIL

43年間南米一筋!ブラジル専門の旅行会社(株)アルファインテル

## ブラジルへの ご旅行・出張 は 創業1979年の アルファインテル に お任せください。

新型コロナウィルスの世界的な流行により、海外旅行に行くのは難しい状況が続いています。海外旅行に対する考え方も変わり、より安心・安全が求められるようになりました。

コロナ禍でも、アルファインテルは南米系旅行会社で唯一のIATA(国際航空運送協会)公認代理店として、主に在留ブラジル人の皆様にブラジル行きの航空券を手配し続けている実績があります。

ご出発前に必要なPCR検査・陰性証明書の様式やワクチンパスポートなど、各国の要件も最新情報にてご案内し、より安心・安全な旅をご提供します。

主要取扱航空会社:ルフトハンザドイツ航空、カタール航空、エミレーツ航空、エールフランス航空、KLMオランダ航空、ラタム航空、アメリカン航空、ユナイテッド航空、デルタ航空、トルコ航空、イベリア航空、ゴル航空他

航空券のほか、現地のホテル、車両、ガイドの手配も実績ある弊社にご用命ください。

### お客様のお声

2007年よりアルファインテルさんとブラジル音楽好きに特化したブラジルツアーを開催しています。なかでも2010年度のジョン・シルベルト&ルイス・ゴンザガの故郷訪問ツアーは思い深いです。案内してくれた現地ブラジル人ガイドさんも「こんな所に来たの初めて!」と写真を撮りまくるほどでした(笑)。入手困難なイヴェッチ・サンガロのコンサートチケットを人数分確保していただいたことにも感謝しています。コロナが収束したらまた再開しましょう!引き続きよろしく申し上げます!

ブラジルへ帰国する際は必ず利用させていただいています。乗り継ぎ便に間に合わないトラブルなど、いざという時にブラジル現地でも相談できるので、安心してブラジルへ行けます。また、ブラジル観光地のことを知り尽くしたスタッフが旅行プランを提案してくださるので、はじめての方でも失敗しない最高のブラジル旅行を楽しむことができます。

僕が海外を旅するようになったのは25年くらい前。月日が経ち今は毎年のようにブラジルに行く生活になりました。治安状況の変化や新型コロナのような感染症が流行ったりしたとき、旅のアマチュアである僕らには知りようがない正確な現地情報や、危険を避けるノウハウが旅行会社にはあって、航空券をそこで買うということは、旅が終わる日本の土地を踏むまで見守ってもらっている、という安心感があることに気がきました。旅の目的や希望実現のためのプランも一緒に考えてくれます。安心して旅の準備で実は一番大切なポイントですし、アルファインテルさんの細やかな対応や気遣いが本当に助かります。

Willie Whopper氏  
(Barzinho Aparecidaオーナー)



平野勇パウロ氏  
(株)アルファインテル  
代表取締役



宮澤摩周氏  
(パーカッション・  
Quer Swingar Vem Pra Cá代表)



観光庁長官登録旅行業 第1835号  
東京都港区西新橋1-20-10 西新橋エクセルビル7階  
株式会社アルファインテル  
電話: 03-5473-0541  
e-mail: info@dalfainter.co.jp



Accredited Agent



photo by Junko Sekine

水泳・競泳  
HIROKO  
MAKINO

マラソン  
YUKI  
KAWAUCHI

スキー・ジャンプ  
RIKO  
SAKURAI

パラ水泳  
CHIKAKO  
ONO

パラ陸上(やり投げ)  
TAKUYA  
SHIRAMASA

車いすバスケットボール  
AMANE  
YANAGIMOTO

車いすバスケットボール  
KEI  
AKITA

# ワクワクするような挑戦を

あいおいニッセイ同和損害保険は、挑戦するアスリートとともに成長していきたいという想いのもと、  
全社員が一丸となって、スポーツ支援を行っています。

立ちどまらない保険。

**MS&AD** あいおいニッセイ同和損保



CAFÉ  
**FAZENDA  
ALIANÇA**  
SPECIALTY COFFEE  
SINGLE ORIGIN



Encantando os paladares mais exigentes  
O café produzido no município de São João da Boa Vista que fica na região centro-leste de São Paulo, pelo empresário Renato Ishikawa, é cuidadosamente elaborado a partir de grão 100% arábica, selecionado a cada lote e possui certificados internacionais de qualidade (Rain Forest Alliance e UTZ), e além disso, preocupado com a proteção ambiental, preserva 30% da mata virgem onde a exigência legal é de 20%.

コーヒーを愛する人への極上の一時  
サン・ジョアン・ダ・ボア・ヴィスタ市(サンパウロ州の中央部)で、日系実業家石川レナト氏の農園で生産されたコーヒーは、ロットごとに選別された100%アラビカ豆から丁寧に作られており、厳しい国際的品質証明書(レインフォレスト・アライアンスとUTZ)を取得しています。さらに、環境保護法でコーヒー農園に課せられている20%の森林保全に対し、30%を保全し、環境にも配慮しています。

日本代理店

ミカド珈琲店 日本橋本店

ミカドコーヒー 日本橋室町三井タワー店

ミカドコーヒー 軽井沢旧道店

ミカドコーヒー 軽井沢 プリンスショッピングプラザ店

ミカドコーヒー 軽井沢ツルヤ店(スーパーツルヤ軽井沢店)

株式会社ミカド珈琲商会

サザコーヒー筑波大学アリアンサ店

オンラインストア <https://mikado-coffee.com>

住所

東京都中央区日本橋室町1-6-7

東京都中央区日本橋室町3-2-1, 日本橋室町三井タワー5階CAFE & BIZエリア

長野県北佐久郡軽井沢町大字軽井沢786-2

長野県北佐久郡軽井沢町軽井沢1178-798

長野県北佐久郡軽井沢町長倉2707

東京都港区三田2-21-8

茨城県つくば市天久保3丁目1

ブラジル・サンパウロでお住まいをお探しでしたら  
 コジロー出版不動産部にお任せください

日系進出企業の駐在員が多数住むサンパウロ市パライゾ地区の  
 優良アパートをご紹介します。

内覧からオーナーとの交渉、契約書締結、お部屋のリフォーム  
 家具の購入、入居手続きの立ち会いまで全て日本語でサポートいたします。

フラットホテルの手配も行っております。

ブラジルへ渡航される前にお気軽にお問い合わせください。

↓ お問い合わせ（日本語でどうぞ）



LINE +55 (11) 99478-2433

✉ ed.kojiro@gmail.com

ふせなおすけ  
 担当 布施直佐（不動産仲介業者）  
 不動産業者協会登録番号 (CRECI)  
 258600-F

物件の写真はこちらでご覧になれます → [https://note.com/pindorama\\_re](https://note.com/pindorama_re) | [@pindorama.real.estate](https://www.instagram.com/pindorama.real.estate)

Churrascaria  
**Que Bom!**  
[www.que-bom.com](http://www.que-bom.com)

Produzido pela  
**ATHLETA®**

**LOJA ASAKUSA**  
 TEL: 03-5826-1538  
 TOKYO-TO TAITO-KU  
 NISHI ASAKUSA 2-15-13 Nikkoshi B1F

**LOJA SHIMBASHI**  
 TEL: 03-6402-5685  
 TOKYO-TO MINATO-KU  
 SHIMBASHI 4-1-1 SHINTORA CORE 2F



Leading  
 You Forward

充実の体制で中南米に関する高品質なリーガルサービスを提供

中南米における豊富な駐在経験と現地事務所との密接なネットワーク

西村あさひ法律事務所は、世界18拠点で750名を超える国内外の弁護士が緊密に連携し、最高レベルのリーガルサービスをワンストップで提供する日本最大の国際的総合法律事務所です。ブラジル、メキシコ、アルゼンチンをはじめとする中南米各国での駐在経験がある弁護士を含む中南米プラクティスグループを設け、ノウハウや情報の蓄積に努めております。また、中南米の主要な国の多くの有力法律事務所との間で人材交流も含めた強固な関係を構築しているほか、Lex Mundi等の国際的な法律事務所ネットワークを活用し、中南米のほとんどの国において有力な現地法律事務所と関係を有しています。

東京およびニューヨークから有機的にサポート

西村あさひ法律事務所の東京事務所には、中南米の法務について豊富な経験を有する弁護士が多数在籍し、日本企業の皆様の中南米における事業展開をご支援しています。また、ニューヨーク事務所(Nishimura & Asahi NY LLP)においても中南米に駐在経験がある弁護士が常駐し、東京事務所とニューヨーク事務所の各弁護士が有機的に連携することで、日本と中南米の地理的な距離や時差のギャップを埋めつつクライアントの皆様にも万全のサポートをご提供しています。

**NISHIMURA  
 & ASAHI**

西村あさひ法律事務所の中南米プラクティスに関する弁護士等、主な案件実績、関連する論文/セミナー等については、以下よりご覧ください。



ブラジル



[www.nishimura.com](http://www.nishimura.com)

お問い合わせ

[latinamerica@eml.nishimura.com](mailto:latinamerica@eml.nishimura.com)

東京事務所 中南米担当: 清水誠、古梶順也  
 ニューヨーク事務所 中南米担当: 山口勝之、梅田賢

Tokyo Nagoya Osaka Fukuoka Bangkok Beijing Shanghai Dubai Frankfurt Düsseldorf  
 Hanoi Ho Chi Minh City Jakarta\*1 Kuala Lumpur\*1 New York Singapore Taipei Yangon \*1 Associate office

# 360° business innovation.



## 世界の未来を、ブラジルとつくる。

### [Business innovation-1]

鉄道と港湾を一体化させ、物流を効率化。

鉄道網と港湾ターミナルの複合一貫サービスを提供するVLI社に出資参画。  
たとえばサントス北西のティブラム港で、取扱貨物を次々と拡大。

### [Business innovation-2]

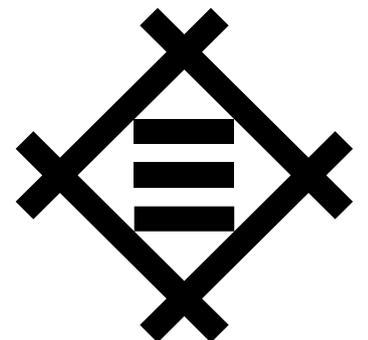
現場のニーズに細やかに応える農薬事業で、農業の発展を。

オウロフィーノ社に出資参画。大規模な農地が多いブラジルで、  
気候条件に適した農薬製剤を開発。作物の順調な生育を農薬で支え、増産や品質向上に貢献。

### [Business innovation-3]

自動車リースで、社会をもっと便利に、もっと豊かに。

中南米最大の自動車市場ブラジルで、トヨタと共に B to B 向けリース事業“KINTO”を展開。  
カスタマイズ自在のサービスで、社会全体の「保有」から「利用」という動きに応える。



世界の未来を、世界とつくる。三井物産

**MITSUI & CO.**